様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００２３８

研究課題名（和文）日韓併合時代における韓国伝統舞踊≪太平舞≫の再創造

研究課題名（英文）Re-creation of Korean Traditional Dance "Taepyungmu" during Japan-Korea Annexation

研究代表者
蔡　美京（Sai, Mikyung）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：４０８６７２２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：朝鮮王朝時代に巫女が即興的に踊った「王の舞」を韓成俊（1875-1941：ハン・ソンジュン）が古典により再編し、≪太平舞≫と名付け、伝統舞踊として再創造した。本研究は、まず先行研究では触れられてない、日韓併合時代に着用した≪太平舞≫の衣装と装束に着目した。その結果、王の衣装ではなく、朝鮮王朝時代の文武官の衣装で踊った事を解明した。また伝統舞踊が再創造された意義と、朝鮮（韓国）の民族的矜持、「朝鮮音楽舞踊研究所」の活動、現在の韓国重要無形文化財となるまでの過程とその意義を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
政治的・文化的抑圧下での、民族的矜持による朝鮮（韓国）伝統舞踊の再創造を、日本語によって研究を行う事が意義深いと考える。両国の公的史料だけでは知りえない、伝統芸能者への取材などにも基づく本研究が、日本の伝統芸能研究者・実演者にとっても別の観点から伝統舞踊継承の理解に繋がると考える。また植民地支配を受けた地域における伝統継承の在り方にも一石を投じることになると考える。

研究成果の概要（英文）：Hang Sung Jung (1875-1941) re-organized "King's Dance", which was impromptu medium's dance during Korean Dynasty, in line with tradition and re-created it as Traditional Dance, naming < Taepyungmu >. This Study focused upon the dress and the costume of the < Taepyungmu > during the era of "The Office of Governor-General of Korea", which never appeared in the precession Studies. This study finally proved that the Dress and costume was not "of the King's ones" but "of the Military Officer's". Further, this study examined the significance of the Re-Creation of Traditional Dance, the pride of the Korean race, the Activities by "Korean Music and Dance Institute” and its succession until it became "The Important Intangible Cultural Property of Korea".

研究分野：比較舞踊論、韓国伝統芸能（舞踊）、舞踊文化史

キーワード：韓国伝統舞踊　日韓併合時代　朝鮮総督府　太平舞　朝鮮王朝時代　植民地の文化政策　民俗的矜持　再創造

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日韓併合時代の朝鮮半島では多くの伝統文化が失われたと言われている。この時代の伝統芸能（舞踊）に関する研究は、韓国・日本においては非常に少ないのが現状である。確かに新たに変容され、失われた部分もある。他方、舞踊の内容が新たに体系化され、この時代に新しく作られた演目もある。中でも、再創造された伝統舞踊≪太平舞≫は、韓国重要無形文化財にも指定され、現在も注目され多くの研究がなされている。しかし日韓併合時代において、韓国（朝鮮）の民族意識がどのように反映され、折り合いをつけて現在に至ったかの研究は、数少ないのが現状である。

２．研究目的

≪太平舞≫の再創造の背景とその意義を研究する上で、今までにない観点からのアプローチを考えた。当時の社会情勢下、韓国においては伝統舞踊の根底に流れる民族意識の高揚を公的に謳える状況ではなく、朝鮮総督府の政策の下、朝鮮民族の真の意味での朝鮮伝統文化保護は考え難く、公的史料も非常に少ない。しかし、当時の日韓の新聞記事やインタビュー記録などの関連資料には、両国における民衆の立場からの、伝統文化に対する根底の意識が窺えるものが多いのも事実である。公的史料だけでは知りえない、これらの資料も含めて、詳細に比較・考察し検討することによってのみ、真の客観性のある歴史的リアリティーに基づく研究成果に至るものと考えた。

３．研究方法

組織（研究協力者）

飯島典子（広島市立大学　准教授）

小林敦子（2021 年度～2023 年度　明治大学兼任講師　2024 年度現在　同大学客員研究員）

（１）当時朝鮮で上演されていた≪太平舞≫や舞踊の史料・資料を検証する。
朝鮮王朝時代のその他の資料を調査、韓成俊の≪太平舞≫の衣装を特定。
時代背景の中から、韓成俊の民族的矜持の実像に迫る。

（２）調査対象を日本と韓国にして、日韓両国の史料・資料（文献、新聞、雑誌等、インタビュー、以下資料）を収集し、社会的背景を客観的視点から考察する。

（３）韓成俊の芸術活動に関する先行研究、公演プログラム、インタビュー資料、新聞記事、雑誌などを日韓双方で収集し照合・比較分析し、≪太平舞≫再創造の背景を検証する。

（４）「朝鮮音楽舞踊研究所」の活動を通じ、伝統舞踊の現代に至るまでの継承を考察する。

４．研究成果

（１）「韓国重要無形文化財≪太平舞≫の衣装と装束の検証」

日韓併合時代には朝鮮王朝の王と王妃の衣装の着用が禁じられ、新羅時代の宮中の衣装を着て≪太平舞≫を踊ったと証言している。

なぜ新羅時代の宮中の衣装を着るようなったのか、実際に着ていたのか等を検証する為、韓成俊が実際に着用した衣装の記録写真と史料を検証した。

更に、韓成俊が、談話で朝鮮王朝の「文武官、百官の衣服を後世に伝えるためには朝鮮舞踊の力を借りなければ到底できない。この意味から見ても朝鮮舞踊の映画化が絶対に必要である」（『春秋』歌舞の諸問題 2 号 1941 年 3 月）と述べている。このことに着目し、歴代の朝鮮王朝の服飾、文武官、百官の服飾に絞って比較分析した。

その結果、新羅時代の宮中の衣装ではなく、実際には朝鮮王朝時代の文武官の衣装、冠、靴などであることを解明した。

朝鮮王朝時代の伝統を守るために、≪太平舞≫を再創造し、韓成俊は衣装を変えてまで朝鮮王朝への忠誠心を示そうとしたことを推論した。

≪太平舞≫が現代にまで伝承された経緯について、韓成俊の直弟子の姜善泳（1925 - 2016）と筆者との間の実演指導、インタビュー取材を基に、「太平舞衣装」に込めた背景を考察し、その位置付けを明らかにした。

「写 1」韓成俊の太平舞衣装
『朝鮮日報』昭和 14 年 11 月 8 日

「写 2」朝鮮王朝時代の
文武官の衣装『英親王李垠伝』2001:13

上記を日本スポーツ人類学会大会（2021.03.26）、韓国文化学会大会（2021.09.26）にて口頭発表し、アジア文化総合研究所学術機関誌『アジア文化』（第 43 号 2022.12、119-130）に投稿・査読を経て採択・掲載された。

（２）「韓国伝統芸能（舞踊）の変容と「朝鮮音楽舞踊研究所」の活動の意義と継承 」

日韓併合時代（1910-1945）に外来文化の流入で近代化へ向けて社会が急変し、舞踊の世界も新舞踊が興り、伝統芸能（舞踊）は衰退の危機状況におかれた。

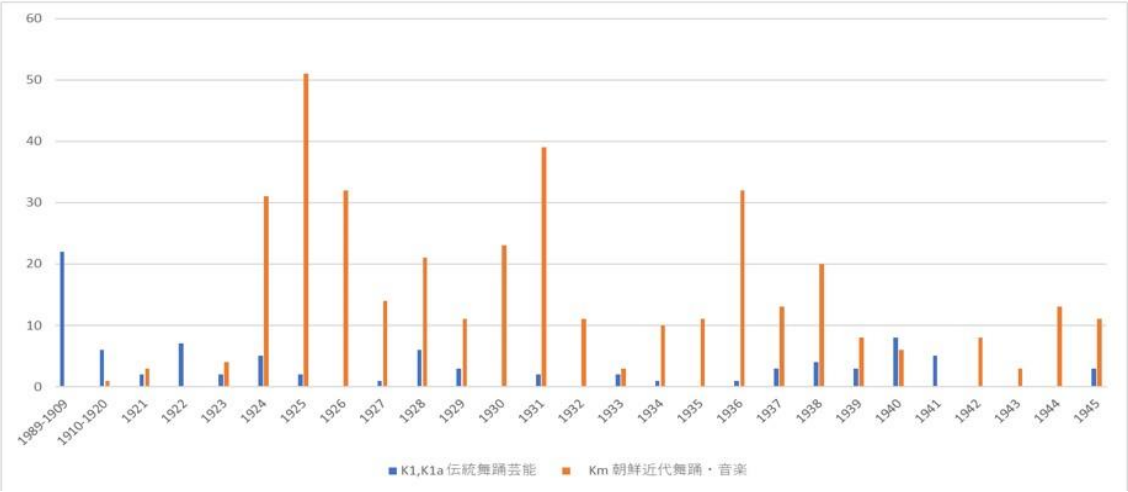
韓成俊は「伝統舞踊が外来舞踊や近代化におされてしまい衰退してしまうのではないか」、「徐々に衰退する朝鮮の古典舞踊のために、一人でも多くの人に朝鮮舞踊を普及させたい」（『朝鮮日報』1938.4.23）（『毎日新報』1939.2.5）という切実な思いから、「朝鮮音楽舞踊研究所」（1937）を創立した。

1937 年から 1941 年まで「朝鮮音楽舞踊研究所」は、朝鮮各地・日本・満州などを、巡回公演を行い、朝鮮の伝統芸能を継承し、日韓併合時代の忘れ去られていく朝鮮（韓国）伝統舞踊を普及させ舞台化させた。

併合時代に衰退していく朝鮮（韓国）伝統芸能の推移を当時の新聞記事・写真から明らかにした。

毎日新報・東亜日報・大韓民報・大韓毎日新報・朝鮮新聞・朝鮮日報により公演記録の集計を行った。朝鮮における「朝鮮の伝統舞踊・芸能」と、欧米や日本などから流入した「近代舞踊・音楽」の比較である。

「表 1889 - 1945、伝統舞踊・芸能と近代舞踊・音楽との年代的推移」



■朝鮮伝統舞踊・芸能　　■朝鮮近代舞踊・音楽

『アジア文化』（第 45 号 2023.179−191 ）

上記の表で示しているように、伝統舞踊・芸能に比べて、外来の近代舞踊（新舞踊）・音楽が急速に伸びている事が分かる。その傾向は、1945 年の朝鮮総督府の終焉（戦争の終結）まで続いている。一方、伝統舞踊・芸能は衰退している事が分かる。

現在は、韓成俊による 3 つの演目が韓国重要無形文化財に指定されており、7 名の保有者（人間国宝）がいる。後進養成のために設立された「朝鮮音楽舞踊研究所」による伝統舞踊の継承は国を越えて、重要な役割を果たしていることを考察した。

上記をアジア文化総合研究所学術機関誌『アジア文化』（第 45 号 2023.179-191 ）に投稿・査読を経て採択・掲載された。

（３）公開シンポジウム

「近代東アジアにおける伝統芸能の変遷 - 日本、台湾、朝鮮半島を事例として - 」

2022 年度、研究協力者（飯島典子・小林敦子）

①台湾：

台湾伝統芸能における「台湾人形劇（布袋劇）」では、元々福建省から伝わったものであるが、日本の植民地統治以後、独自の改変が始まっていたことが明らかにされた。改変には純然たる芸能としての近代化と、人形劇を統治・宣伝に利用しようとした総督府の思惑が絡み合っている。本発表ではその改良と、総督府による統制、利用が人形劇に与えた変化が考察された。（広島市立大学　飯島典子）

②日本：

「『建国音頭』 - 国策盆踊りに埋め込まれた 1940 年の日本 - 」では、神武天皇即位から 2600 年にあたるとされる昭和 15 年、記念行事の 1 つ奉祝芸能祭における「建国音頭」には、新民謡、遊戯舞踊、盆踊り、奉祝の表現といった当時の日本文化の多様な要素が埋め込まれていたことが実演をまじえて考察された。（明治大学　小林敦子）

③韓国：

「韓国（朝鮮）伝統舞踊の継承と新舞踊 - 日韓併合時代の背景において - 」では、日韓併合時代に朝鮮総督府の圧力の下、外来文化が日本経由で朝鮮に流入し、新舞踊が

興り、伝統舞踊の衰退が懸念されていた。その状況を当時の新聞記事から明らかにし、その逆境の時代にあっても伝統舞踊を貫き、伝承してきた背景を考察した。

意義：

本シンポジウムにより、朝鮮と同じように日本の統治を受けた台湾の芸能継承の実情と、朝鮮総督府の文化政策の背景にある、日本の統治方針の影響を相互に理解出来た。

（４）事例報告

本課題の関連研究として下記の研究を実施し公開した。

『比較舞踊学会大会』シンポジウムにて「韓国(朝鮮)伝統舞踊（歌舞楽）における女楽・男楽の検証」を発表した。『朝鮮王朝実録』を基に朝鮮古来の伝統である女楽を拒否した明の使節の前と他国使節の前の宴で、男楽・女楽を使い分けた。併合時代は朝鮮総督府管轄下にあり、女楽が排除され男楽は「李王職雅楽部」となった経緯の政策と背景を事例報告した。

「朝鮮（韓国）伝統舞踊における女楽・男楽の一考察」（『比較舞踊研究』29 巻）科研費基盤（B）「東アジア舞踊の比較研究と共創：琉球舞踊の研究手法を軸として」（JSPS 科研費 JP20H01221、2020-24、代表者　波照間永子）による。

このように朝鮮半島を中心に、日韓両国の公的資料・史料だけでなく、別の視点から、取材やマスメディアの資料などを駆使して、困難な時代における伝統舞踊の再創造と継承を考察して来た。従来アジアの伝統芸能は西洋化の波に抗いながら伝統を維持してきたように語られがちであったが、実際は西洋文化の影響を受けても伝統を守りつつ、また当時の社会事情に抗しても再創造を果たし、現在に至ったと考える方が妥当なのではないかと考える。

今後の課題として本研究の考察まで至らなかった、韓国固有の悲しみと希望という、相反する感情が複雑に入り混じった「恨（ハン）」という概念について試みたい。

韓国の伝統芸能（音楽・文学・絵画・舞踊）の奥底にある「ハン」は、日本語の「恨み」とは全く異なる意味を持っている。

その第一歩として、「韓国伝統芸能に秘められた「ハン」の表現：春香傳のパンソリを事例として」の公開講演で発表を行う予定である。この「ハン」という概念が、日本の伝統芸能にも内在されている可能性をも探り、両国の伝統芸能にみられる民俗性を比較することを課題としたい。日本の伝統芸能者、実演者及び、参加者のコメントを期待している。

（日本伝統芸能教育普及協会むすびの会　東京立正短期大学 2024.06.08）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 蔡美京	４．巻 45
２．論文標題 「韓国伝統芸能（舞踊）の変容と「朝鮮音楽舞踊研究所」の活動の意義と継承」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『アジア文化』アジア文化総合研究所学術機関誌	６．最初と最後の頁 179‐191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 蔡美京	４．巻 29
２．論文標題 「韓国伝統舞踊における「舞童（男楽）・女伶（女楽）」の一考察」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『比較舞踊研究』（JSPS科研費JP20H01221、2020-24、代表者　波照間永子）	６．最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 蔡美京	４．巻 43
２．論文標題 「韓国重要無形文化財≪太平舞≫の衣装と装束検証」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『アジア文化』アジア文化総合研究所学術機関誌	６．最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 蔡美京	４．巻 すぽじん46号
２．論文標題 「日韓併合時代における韓国伝統舞踊の再創造－混迷の時代の新しい芽吹きと継承」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『日本スポーツ人類学会会報』	６．最初と最後の頁 2‐５
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 韓国伝統芸能に秘められた「ハン」の表象　：春香傳のパンソリを事例として
３．学会等名 日本伝統芸能教育普及協会むすびの会（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 韓国伝統舞踊≪サルプリ・チュム≫の スゴン（布）を用いる技法と象徴性　：３つの流派を比較して　ー
３．学会等名 『日本スポーツ人類学会』（JSPS科研費JP20H01221、2020-24、代表者　波照間永子）
４．発表年 2024年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 「現代韓国のK－POPにみられる韓国伝統舞踊の様相」
３．学会等名 明治大学アジア太平洋パフォーミング研究所／日本伝統芸能教育普及協会むすびの会　（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 「近代東アジアにおける伝統芸能の変遷：日本,台湾,朝鮮半島を事例として」
３．学会等名 明治大学アジア太平洋パフォーミング・アーツ研究所　公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 「韓国伝統舞踊において「白」が表象するものとは何か：サルプリ・チュムを事例に」
３．学会等名 お茶の水女子大学　公開講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 「韓国伝統舞踊における「舞童（男楽）・女伶（女楽）」の一考察」
３．学会等名 『比較舞踊学会 第３１回大会』 シンポジウム（JSPS科研費JP20H01221、2020-24、代表者　波照間永子）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 「韓国重要無形文化財≪太平舞≫における服飾の変遷」
３．学会等名 『韓国文化学会』
４．発表年 2021年

１．発表者名 蔡美京
２．発表標題 「太平舞の創作意図と背景検証ー舞踊衣装を手がかりにー」
３．学会等名 『日本スポーツ人類学会』
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関